

The Century Dictionary で Caxton: *Reynard the Fox* の 引用を読む

西 村 公 正

1. *OED* が *NED* としていまだ C の項までしか刊行されていなかった時期に、6 巻 6000 頁の大辞典 *The Century Dictionary and Encyclopedic Lexicon of the English Language* (以下 *Century*) が出版された。1911 年を最後に、その後は改訂もなく *OED* に英語辞典としての地位を譲り、ついには英語辞書の歴史物になってしまった。しかし、その名のとおり *encyclopedic* でありながら、語源記述も *OED* に比肩できるほどで、挿絵やその定義記述や説明は *OED* にない特色を持つ。

この辞典が 2001 年に内部のテキスト検索可能な画像形式でインターネット上で公開され、さらに、2003 年に 3 枚組 (内 1 枚は installation disc) の CD-ROM 版として発売されるにいたった。¹

編者の Dwight Whitney はその “PREFACE” の冒頭にこの辞典編纂方針を 3 点挙げている。

THE plan of THE CENTURY DICTIONARY includes three things: the construction of a general dictionary of the English language which shall be serviceable for every literary and practical use; a more complete collection of the technical terms of the various sciences, arts, trades, and

¹ このサイトの存在は谷明信氏 (兵庫教育大学助教授) のご教示によるものである。<http://www.leoyan.com/century-dictionary.com/index.html>

professions than has yet been attempted; and the addition to the definitions proper of such related encyclopedic matter, with pictorial illustrations, as shall constitute a convenient book of general reference. (p.v) (下線は筆者)

この機会に Caxton 訳 *The History of Reynard the Fox* をこの辞典で読むことを試みた。「忘れられた大英語辞典」が中英語を読むのどのように役立つのか、また *OED* との比較もしてみることにによってこの辞典の特色も明らかになるであろう。²

テキスト直接の引用は5例であるが、関連項目も見ることにする。検索は online 上で行い、あとは CD-ROM 版と手元にある 1899 年版で読むことにした。³

2. 直接のテキスト引用のある見出し語は、*apart*, *chanticleer*, *flindermouse* (“a bat” という定義以外に特別の記述はないので以下では触れない), *rack*, *soldier* で、関連項記述が見出し語 *reynard*, *-ard*, *epic* に見られる。

検索キーワードを “Caxton” にして抽出された見出し語のなかに、*semicolon* と *scratch-comma* がある。このうち *scratch-comma* の記述については不正確なので、以下 4.1. で触れることにする。

OED2 on CD-ROM (以下 *OED2*, CD-ROM 版までのものは *OED*) は同じ版からの引用例を 413 語において採録しているが、同じ見出し語は *apart* と *rack* (s.v. *rack* n.3) および *reynard* と *chanticleer* である。³

² 小島義郎『英語辞書物語 (上)』(東京: ELEC, 1989) は、*Century* とともに *A Standard Dictionary of the English Language* (1893-1894) を「忘れられた大辞典とは」の章で紹介している。

³ *Century* も *OED2* も、Edward Arber (ed.), *The History of Reynard the Fox. Translated and Printed by William Caxton, 1481* (The English Scholar's Library of Old and Modern Works, 1878) を使用。なお筆者の参照したのは Reprint 版 (New York: AMS Press, 1967)。

2.1. *rack* は挿絵を持つ見出し語で、しかも定義は *OED2* の 40 語の 3 倍に近い 112 語である。引用は N. F. Blake 版の 24:12 にあたる “Galows and racke.” のみである。*OED2* は “Your hows shal be bysegged al aboute and ther shal be made to fore it galowes and racke.” を引いているが、この引用の長さは同辞典の引用の慣用に従ったがゆえのものであろう。⁴ *Century* の 3 語の引用でことは足りている。なお、引用例の長さについては、後の *soldier* で示すように *Century* は引用を長く採っていることが多い。この点については Barnhart (1980) も “Individual quotations in the *Century* are often fuller and more illuminating than those in *Oxford* [筆者注 *OED*] (p.39)” (下線は原文) と述べているとおりである。⁵

2.2 *apart* は引用に “That causeth me a parte to be hevy in my herte.” を引き、そのあとに “(N.E.D.)” とあり、*OED* そのままである。定義の “In part, partly” も全く同じである。

3.1. *soldier* に *Century* の本領が発揮されている。その定義の 1 は “One who receives pay, especially for military service” で引用は *Reynard the Fox* からのもののみであるが、この 1 例でもってその定義をすべて裏付けるものである。Blake 版では 37:36 から 38:8 にわ

「Blake 版」は N. F. Blake (ed.), *The History of Reynard the Fox translated from the Dutch Original by William Caxton* (EETS No. 263, 1970). 引用文は、断りがない場合はそれぞれの辞典を転写したものである。

⁴ この引用で *Century* の “Galows” が *OED2* では “galowes” となっているが、Blake も “galowes” として、しかもページ下の edition 間の異同の記載はない。筆者の Reprint 版でも “galowes” となっている。*Century* の転写間違いかも知れない。

⁵ Clarence C. Barnhart, “What Makes a Dictionary Authoritative,” in Ladislav Zgusta (ed.), *Theory and Method in Lexicography* (Oxford University Press, 1980), pp. 33-42.

たる 27 行である（[[]]内は「...」の記号で省略されている：以下は Blake 版より引用）。

bruyn the bere and ysegrym the wulf sente alle the londe a boutte / yf ony
man wolde take wages / that they shold come to bruyn / and he wolde paye
them their souldye or wagis to fore. my fader ranne ouer alle the londe and
bare the lettres. [[he wist lytil that he was robbed of his tresour. ye though
he myght haue wonnen al the world. he had not conne fynde a peny
therof.]]

Whan my fader hadde ben oueral in the laude bytwene the elue and the
somme. And hadde gotten many a souldyour that shold the next somer haue
comen to helpe bruyn. （下線は筆者）

souldye (= noun “pay”) は語源欄に *sold*² への参照指示があり、この引用で定義中の “pay” をも示すことができたわけである。しかも語源を同じくするもので、巧みな用例となっている。*OED2* は “historical dictionary” であるから、初出例から年代毎の用例を挙げなければならないので、この定義にあたるところには form variants ごとに “form branch” を設定している。⁶ したがって branch が 5 つ必要になり用例も 50 例近くにのぼるが、*Century* のこの引用における巧みさはここにはない。

ただし、このような引用の工夫は *OED2* に見られる場合がある。以下に *OED2* s.v. *rape* n2 の 3.a で “3.a. Violation or ravishing of a woman. Also, in mod usage, sexual assault upon a man.” と定義し、用例は以下のように採っている。

There auysschyd he and forcyd my wyf . . . See my lorde this fowle mater,
this is murdre rape and Treson.

これは Blake 版の 89:15 から 90:2 にあたる 27 行であるが、“rape” と

⁶ “form branch” は、Donna Lee Berg, *A Guide to the Oxford Dictionary* (OUP, 1993), p. 20 に拠った。

関連する “ravish and force” を共に提示するために、“rauyschyd” から “rape” までの間の 25 行を 「…」でもって省略しなければならなかった引用である。

<i>OED2</i>	<i>CENTURY</i>
bastard	bastard
	billiard
	bombard
braggar	
braggard	
braggart	
bragger	
buzzard	
canard	
cokade	
cockard	
	costard
	costate
couard	
coward	coward
	crustate
	custard
	dotard
drunkard	drunkard
	dullard
laggard	
mallard	
mouchard	
placard	placard
sluggard	
standard	standard
standar	
stander	
vieillard	
wizard	wizard

3.2. “Reynard” の *-ard* を両辞典とも見出し語にしている。語源欄を比較すると、*OED2* は、“often forming part of personal names . . . a formative of common nouns, generally pejorative” とし、*Century* は “In personal nouns it usually has a sinister implication.” (両下線とも筆者) と記述する。語源欄について Whitney は *NED* を参考にしたことを明らかにして次のように述べている。

the most helpful being those of Pro. Skeat and Eduard Müller, and the “New English Dictionary . . . (which, however, could be consulted in revising the proofs of A and of part of B only): but the conclusions reached are independent. (p.vii)

Century の *-ard* 語源欄は *OED* を参考にしたであろう。左に両辞典の語源欄に挙げられた語を比較しておく。これを見ても、“historical dictionary”である *OED* と Barnhart

(1980) の言う “unabridged descriptive dictionary” (p. 39) との違いが

わかるし、また Whitneyが “PREFACE” の冒頭で述べる “serviceable for every literary and practical use” (cf. 本稿 p. 7) という彼の目指すところが出てしていると解釈できる。

3.3. *reynard* の項では、*Century*は語源の記述において、*OED*を凌ぐばかりではない。 “Low German origin (‘Reynard the fox’)” における動物の擬人化の名前を挙げている。

Reynardの他には、“the lion” (Noble), “the cat” (Tibert), “the bear” (Bruin), “the wolf” (Isegrin) がある。

3.4. *chanticleer*の項で *Century* はChaucer (“Nun’s Priest’s Tale”) とChattertonから引用しているが、*OED2* は、1300年のものを初出例として、続いてChaucer, Caxton: *Reynard the Fox*から引用例を挙げている。

*Reynard the Fox*では動物の擬人化による人物の固有名詞が36語ある。Blake は巻末の “INDEX OF NAMES” でこれらを固有名詞として “GLOSSARY” とは区分して扱っているが、*OED2*にあるように “A quasi-proper name given to the fox; also occas. used as an ordinary noun.” (s.v. reynard) である場合はゲルマン語・ロマンス語圏以外の読者のためには “GLOSSARY” に入れておく方が便利がよい。

*Century*はreynardについてその見出し語の語源欄で、“which became so popular that *reynard* in the common speech began to take the place of the vernacular OF. *goulpi*, *goupi* fox and finally supplanted it entirely” ということも付け加えてくれている。これによって、当時のヨーロッパにおいてこの「狐物語」がよほどおもしろい物語として人々のあいだに広まっていたことがよくわかる（なお、白水社『仏和大辞典』(1981) にも、「12~13世紀の＜狐物語＞ *Roman du Renard* の主人公の名前：これが普通名詞goupilに取って替わった」 (s.v. renart) とある)。

3.5. 見出し語 *epic* の記述は *Century* の “encyclopedic dictionary” としての本領をよく示す例の 1 つであろう。

各言語における神話的 *epic* を *epic* の典型としたうえで、Sanskrit, Persian から North American Indian まで 8 言語 8 作品を挙げている。動物が登場人物である *epic* は “animal epic” と呼ばれてきたとして、ホメロスの *Batrachomyomachia* と中世低地ドイツ語の *Reynard the Fox* を示す、という具合である。

4.1. 見出し語 *scratch-comma* は diagonal [/] のことで、“used as a comma by Caxton” としているが、*Reynard the Fox* で Caxton が使っている punctuation 符号は複雑で、この符号が comma としてのみ使われているわけではない。*OED2* も見出し語 *scratch* のなかで合成語として “scratch-comma” をあげて “a diagonal stroke used by some early printers in place of the comma” と説明しているが、共に不正確な記述である。

5. 以上、Caxton の *Reynard the Fox* のわずかな例を引いて *Century* の記述を、時には *OED* と比較しながら検討したが、これだけでも “encyclopedic dictionary” とはどのようなものか、“historical dictionary” との違いが明確にわかる。Barnhart は *OED* のような “historical dictionary” は “has permanent value because of the dating of quotations from the first use of the word” と述べる。一方 *Century* のような “encyclopedic dictionary” の価値については、“has permanent value, as it contains more information in the explanations or definitions than the historical dictionary does” と述べているが、このことはこの稿で扱ったわずかな例によっても裏付けられることである。⁷ さすがに自然科学 (“technical terms of the various sciences”— cf. 本稿 p. 1 に引用の “PREFACE”) の分野は 100 年の歳月の隔たりがあるので実用に

⁷ Clarence C. Barnhart, *ibid.*, p.39.

は向かないであろう。しかし、人文科学の分野では *Century* は **definition** そのものだけでなく、それにつけ加えられた百科的情報が、英語辞書を引きながら得られるところに価値がある辞書である。